



生 点

馬場錬成先生



歯科保健シンポジウム
一生自分の歯で食べるために

高齢社会と歯科保健

NHK放送委員 村田 幸子 先生

成果と残された課題

ジャーナリストから見た日本の

歯科保健対策の問題点

NHK放送委員 小原 修人 先生

フッ素応用による

むし歯予防は世界の常識

福岡市歯科大学 佐々木 隆雄 先生







境
脩
先生

小
原
博
人
先生



日本の
問題点
原博人先生

防は世界の常識
松境脩先生

馬場錬成



村田 幸子 先生

萩原 吉則 先生

健 先生
課題 先生

平成11年度群馬県歯科保健賞受賞記念

歯科保健シンポジウム in 甘楽

一生自分の歯で食べるために

と き 平成12年 6 月25日(日)
午後 1 時30分～

ところ 甘楽町文化会館

主 催 甘楽町

共 催 富岡甘楽歯科医師会・富岡保健福祉事務所

日 程

開 会 午後1:30～

あいさつ

基 調 講 演 午後1:40～2:²⁰~~40~~ 「フッ素応用によるむし歯予防は世界の常識」

福岡歯科大学予防歯科学講座教授 境 脩先生

講 演 1 午後2:20～2:40 「ジャーナリストから見た

日本の歯科保健対策の問題点」

毎日新聞社編集委員 小 原 博 人先生

講 演 2 午後2:40～3:00 「高齢社会と歯科保健」

NHK 解説委員 村 田 幸 子先生

講 演 3 午後3:00～3:20 「富岡甘楽地区の歯科保健対策の

成果と残された課題」

富岡甘楽歯科医師会 萩 原 吉 則先生

休 憩 午後3:20～3:30

シンポジウム 午後3:30～4:20

座長 読売新聞論説委員 馬 場 錬 成先生

閉 会 午後4:30

馬場 錬成（ばば れんせい）読売新聞論説委員

1940年、東京都生まれ。

東京理科大学理学部卒業後、読売新聞社入社、編集局社会部、科学部、解説部を経て論説委員。科学技術、産業行政、知的所有権、研究・開発、医学・医療問題などを担当。

【公職】

1999年－現在 新製造技術戦略策定会議委員（通産省）

1996年－現在 文部省・学校給食における衛生管理に関する調査研究協力者会議委員

1996年－現在 農水省・農林水産先端産業技術研究推進委員会委員

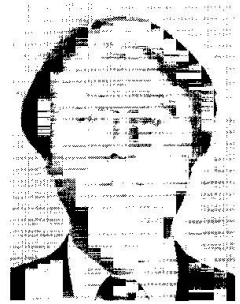
1998年－現在 科学技術庁・「サイエンスチャンネル」政策審査調査委員会委員

1998年－現在 文部省・学術審議会がん研究部委員

1997年－現在 東京都・住宅防火対策推進協議会委員（東京都）

1999年－現在 宇宙開発の基本戦略に関する懇談会専門委員（科学技術庁）

1999年－現在 建築審議会委員（建設省）



1999年－現在 21世紀の科学技術に関する懇談会委員（科学技術庁）

【ほかの公的役職】

財団法人・女性科学者に明るい未来をの会理事

研究・技術計画学会理事・評議員

財団法人・腎研究会評議員

日本腸内微生物学会理事

【主な著書】

「帰ってこいよ！東京っ子サケ」（借成社）

「発想のタネになる科学の本」

（講談社ブルーバックス）

ほか多数

甘楽町が日本の先導役になることを期待する

フッ素の水道水への添加でむし歯を予防する公衆衛生が、なぜ日本では推進できないか。世界57か国で実施されているむし歯予防法が、日本では検証もされず、放置されたままになっている。その結果、日本の12歳児のむし歯の数（正式には過去にむし歯になった本数もカウントする）は、先進国の中で最も多くなっている。つまり日本の子供は、むし歯有病率で世界のワースト1である。

昔からむし歯の多い国は、一人当たりの砂糖の消費量の多い国だった。たとえばオーストラリアの国民一人当たりの砂糖消費量は、日本の二倍以上である。しかし12歳児のむし歯の本数は、逆に日本の子供の方が二倍以上である。オーストラリアをはじめアメリカ、フィンランド、デンマークなど多くの国で、微量のフッ素を水道水に添加する公衆衛生をやっているからだ。

日本歯科医師会と厚生省の怠慢が、国民の歯の健康をないがしろにしている。同じ問題が脳死による臓器移植のときもあった。脳死問題では、世界で「脳死を死」と認めない国が、日本とパキスタンとルーマニアになったときに、厚生省はようやく腰を上げた。超党派の議員立法で脳死移植を認める「臓器移植法」が成立したが、実態は厚生省の立法化だった。脳死移植に反対する一部の人たちの抵抗を恐れて、この問題を厚生省は20年以上も放置してきた。面倒なことは避けて通り、すべて先送りした怠慢行政によって、助かる命も助からず、中には高い金を準備し、外国へ行って移植を受ける人もいた。20年間の怠慢は、誰も責任をとらなかった。日本の医師界も、脳死問題では積極的に動かず、ただ漫然と20年以上を浪費した。

フッ素添加の水道水がいいのか悪いのか。なぜ、やらないのか。その明確な理由を歯科医師界も厚生省も国民に示していない。しかし、いずれ日本でも水道水フッ素添加は始まるだろう。ある時点から堰を切ったように全国に広がるだろう。群馬県甘楽町は、その先導役になってもらいたい。

境 脩 (さかい おさむ) 福岡歯科大学予防歯科学講座教授



【学歴】

- 1960年 3月 東京医科歯科大学歯学部卒業
1964年 3月 東京医科歯科大学大学院 歯科学研究科終了 (予防歯科学)
1964年 3月 歯学博士 (東京医科歯科大学 甲)

【職歴】

- 1965年 4月 東京医科歯科大学助手歯学部 (予防歯科学)
1968年 4月 新潟大学助教授歯学部 (予防歯科学)
1981年 1月 WHO Temporary adviser
1982年 9月 文部省在外研究員 (NIDR 米国国立歯科衛生研究所)
1987年 2月 福岡歯科大学教授歯学部 (予防歯科学)

- 1993年 4月 福岡歯科大学学生部長

【学会及び社会における主な活動】

- 1977年 4月 日本口腔衛生学会理事
1979年 4月 IADR・JADR (国際歯科学会) 会員
1980年 7月 FDI (国際歯科連盟) 支持会員
1981年 4月 日本口腔衛生学会フッ素研究委員会委員
1988年 6月 ADA (米国歯科医師会) 支部会員
1992年 4月 AAPHD (米国歯科公衆衛生学会) 会員

- 1994年 10月 東京医科歯科大学口腔病学会評議員
1994年 10月 第1回アジア予防歯科学研究大会 (APDC '94) 会長
1995年 7月 日本歯科医学教育学会常任理事 (編集委員長)
1995年 7月 歯科医師国家試験委員 (厚生省)
1996年 1月 学術審議会専門委員 (文部省)
1998年 1月 日本歯科医学会フッ化物検討部会委員
1998年 4月 日本口腔衛生学会フッ化物検討委員会委員長
1999年 4月 日本口腔衛生学会九州地方会幹事長
1999年 4月 第48回日本口腔衛生学会総会学会長
1999年 11月 日本むし歯予防フッ素推進会議水道水フッ素化推進委員会委員長

フッ素応用によるむし歯予防は世界の常識

今日、医療の問題は一般住民の方々の生活に直接かかわる重要な問題として認識されています。注目すべきことは、それが生命や健康に直接かかわりが深いという理由からだけでなく、人々の日常の「生活」との関わりから社会的な関心や反応が年々高まっていることです。「健康は生活の資源」であり、このことが「QOL (生活の質の向上)」と医療を切り放すことのできない深いつながりにあることの重要な意味となっているのです。

歯科保健におけるフッ素の応用は、ここ数十年におよぶ膨大な研究に支えられて国際的にも歯科保健上の基本的な施策として確固たる地位を築いてきました。その理由は、単に、確実に大きなむし歯予防効果がEBM (Evidence based medicine: 証拠に基づいた医療) からみても立証されているというばかりでなく、天然のフッ素地域で得られた自然の知恵を応用した水道水フッ化物添加や、自然食品に含まれるフッ化物の日常的な摂取経験からみた安全性の保障、高い費用効果率に代表される経済性などが挙げられます。そして、これらの特徴によって支えられる優れた公衆衛生特性ゆえに、フッ素は広く地域住民を対象にした公衆衛生的応用が可能である点が強調されています。

このフッ素によるむし歯予防は、先進国をはじめ世界のほとんどの国において普及のための懸命な努力が続けられています。世界保健機関 WHO および国際歯科連盟 FDI は世界各国のフッ化物の利用状況についてその調査結果について報告を続けていますが、これらによると現在、世界でフッ素を至適濃度に調節 (水道水フッ化物添加) した水道水を使用している国が57カ国、フッ化物錠剤を利用しているのが67カ国、フッ化物配合歯磨剤の使用が97カ国、フッ化物洗口などは81カ国に及んでいます。このように最近では、世界の

多くの地域や国々において種々の公衆衛生的なフッ化物の応用が進められ、そうした地域からは、すでにむし歯有病率の劇的な減少を伝える報告が相次いでいるのです。

むし歯は小児科の病気です。保育園・幼稚園から義務教育期間における実効ある対策の有無が、こども達の生涯にわたり健康な歯を保つための重大な要素となるばかりでなく、さらに注目すべきことは、小児に対する地域や学校における歯科保健対策の良否が、その地域社会全体の人々の将来にわたる歯科保健状態を決定することになる、ということです。むし歯が一度罹ると後戻りできない病気であり、充填処置などの治療がなされても、再発の危険が高く、結局は歯を失っていくことが少なくないこと、永久歯のむし歯に罹る時期が義務教育期間に一致すること、地域のほとんどすべての人々がその地域の学校に通い卒業していくという紛れもない事実から、このことは明らかなこととされているのです。最近、わが国において提唱されている“80歳になっても20本の噛める歯を”とする8020運動の目標達成のためにも、この問題は不可欠の要素とされています。

世界の多くの国がこれまで営々として築き上げてきたむし歯予防における科学的、社会的、国際的そして歴史的な評価は、今後、わが国に必要とされる歯科保健の再構築にとって大きな指針となると考えます。私たちが今もっている限られた力を有効に使い、われわれの身近な健康問題について、今、何を、どう、優先的に進めるかを考える時期に至っていると思われまふ。考えてみる価値ある問題ではないでしょうか。

小原 博人（おはら ひろと）毎日新聞編集委員

1946年、東京都生まれ。

1969年、東京外国語大学インドネシア語学科卒業後

毎日新聞社入社。甲府支局、社会部、地方部を経て、
現在編集委員。

日中戦争の実相、現代コメ問題など取材。キシリトール
の取材から日本人のむし歯の問題に出会った。



ジャーナリストから見た日本の歯科保健対策の問題点

南米コロンビアで歯痛に耐え兼ねた男性が、ピストルを口の中に差し入れ、痛みのもとになっているむし歯を撃ち抜いたという新聞報道を数年前読んだことがある。あごが吹っ飛んだのはいうまでもない。かほどに歯の痛みは手に負えない。この痛みから逃れられるなら、他のどんな苦痛も我慢できるとさえ思う。子供のころ、痛みで泣きじゃくる妹のむし歯に、おじが新聞紙をあぶって滴り落ちた液を塗りつけたことがある。この液が痛みを軽くすることだったが、もちろん効果はなかった。

初めて「歯」を取材したのは3年ほど前のことだ。「キシリトールって知ってる？」と、会社の事業系統の同僚から聞かれた。「何、それ」と問い返したら、「実はガムの会社がキシリトール入りガムの販売を大々的に始めた。むし歯予防に良いそうで、ガム業界の注目株。今後のために一度、記事にしてくれないか。」との頼みがくっついてきた。

こうしてキシリトール礼讃記事をものした。ある歯科大のキシリトール派の先生の説明になるほどとうなづき、紹介した記事はなにがしかガム会社の販売成績に寄与しただろう。そんな私が非専門の立場ながら、どのようにキシリトールを離れ、なぜフッ素を支持するようになったのか、それをお伝えしたい。

中三の時、早くも左下奥歯を失ったのを最初に歯との下手な付き合いに終始してきたてつを、今の子供たちが踏まないようにと願っている。

村田 幸子 (むらた さちこ) NHK 解説委員

1963年 3月 立教大学英米文学科卒業
1963年 4月 NHK にアナウンサーとして入局
1968年～69年、1981年～83年の2回、大阪放送局(アナウンス室)勤務

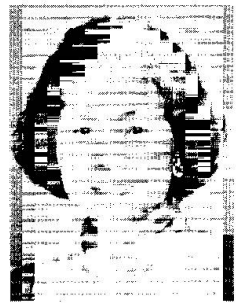
【仕事の内容】

- ・報道番組のレポーター(スタジオ102、NHK ニュースワイドなど)
 - ・社会性のある硬派の番組を中心に担当(エリザベス女王来日の際の中継、東京サミットの中継、カーター大統領の宮中晩餐会中継、総選挙総合司会ほか)
- 1979年 2月 モナコのモンテカルロでおこなわれた「女性 TV 司会者会議」に、NHK 代表として出席。

1990年 6月～現在 解説委員(厚生行政担当)

【公職】

中央社会保険医療協議会委員、身体障害者福祉審議会委員他



【主な仕事】

NHK スペシャル「あなたが寝たきりになった時」のキャスター
NHK モーニングワイド、シリーズ「高齢化社会」のキャスター ほか多数
現在「ラジオタ刊」編集長

【著作】

「女の魅力は話し方できまる」(主婦と生活社)
「仕事を語る女たち」上、下巻(かのう書房)

高齢社会と歯科保健

①8020運動の根拠

口の中のトラブルは、単に口の中だけに止まらず全身の健康や生活の質にも影響を及ぼす。そのために、自分の歯で食べ、喋ることが出来るようにしておくことが大事と、80歳になっても20本の歯を残そうという運動を展開。

②歯の丈夫な高齢者は元気

食べたいものを食べ、行きたい所に行ける。生きるハリもある。

③6・5人に一人は、8020達成(1999年、歯科疾患実態調査)

しかしまだ平均寿命との差がある。

8020運動だけで、高齢者の歯科保健は万全か。

④「歯は死ぬまで使えるもの」

個人の努力、専門家の指導、行政の役割
などなど。

萩原 吉則 (はぎわら よしのり) 社団法人富岡甘楽歯科医師会

【学歴】

1982年 3月 新潟大学歯学部卒業

【職歴】

1982年 4月から3年間の勤務医を経て

1985年 4月 萩原歯科医院を甘楽町上野で開院し、現在に至る。

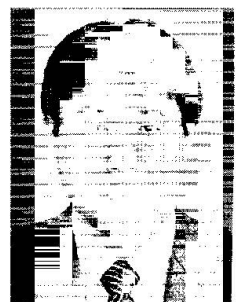
【役職等】

1990年4月～92年3月 群馬県歯科医師会 公衆衛生委員会委員

1992年4月～97年3月 富岡甘楽歯科医師会 公衆

衛生担当理事

1997年 4月～ 富岡甘楽歯科医師会 専務理事



富岡甘楽地区の歯科保健対策の成果と残された課題

富岡甘楽歯科医師会〔会員36名〕は、平成4年5月に完成した富岡甘楽口腔保健センターに事務局を置き、地域の歯科保健の充実をめざしてきました。歯科医師会には常勤歯科衛生士3名〔1名は事務を担当〕が現在勤務しています。

平成5年には、公衆衛生活動の目標を具体化した「各ライフステージにおける歯科保健対策」を立案し、生涯を通した歯科保健システムの確立をめざしています。その対策の内容は、乳歯のむし歯予防対策、永久歯のむし歯予防対策、児童生徒の歯肉炎予防対策から始まり、成人・高齢者の歯科保健対策、訪問歯科診療、訪問口腔衛生指導、心身障害者（児）の歯科診療までを包括する総合的なものです。現在実施されている歯科保健対策の成果と今後の課題について考えてみます。

乳歯のむし歯予防対策

管内全市町村で、乳歯のむし歯予防対策として、従来の歯科保健対策に加えて、フッ素塗布と「家庭でのフッ素利用」を組み合わせた方法が実施されています。その結果、3歳児のむし歯経験歯数が約5本から1.32本に、有病率が約80%から30.5%に、6年間で改善しました〔平成10年度〕。今後必要なのは、むし歯の罹患率が依然として高い、市町村の事業に参加しない児〔10～20%〕への有効な対策です。

永久歯のむし歯予防対策

管内の保育園・幼稚園31施設中の30施設で、4・5歳児を対象にフッ素洗口が実施されています。希望者が対象ですが、実施率は95%を超えています。その結果、小学校1年生の永久歯のむし歯罹患状況が大幅に改善し、平成7年度以降、甘楽郡が県内のトップレベルを維持しています。また、富岡市も平成9年度から市部の中では最もむし歯が少なくなってきました。

平成7年には、歯科医師会・医師会・薬剤師会の連名で提出した「フッ素洗口法の学校歯科保健への導入についての陳情書」が、甘楽町、下仁田町、妙義町で採択になりました。

しかし、小中学校でのフッ素洗口については、一部の教職員の反対が強く、実施できない状況が続いています。ここ数年間、根気強く話し合いを続けてきましたが、進展する様子はありません。そこで苦肉の策として、甘楽町では平成10年度から「小中学生を対象にした家庭におけるフッ素洗口」を開始しました。小中学生の希望者を対象にして、町の予算でフッ素洗口剤「ミラノール」を配布しています。平成12年1月からは、下仁田町でも小中学生を対象に家庭でフッ素洗口を開始しました。

歯科衛生士による巡回歯科保健指導

管内全市町村で歯科衛生士による巡回歯科保健指導が実施されています。対象は、小中学校の児童生徒、幼稚園保育園の園児と保護者です。巡回歯科保健指導は、甘楽町で平成4年度に初めて予算化され、その後他の市町村でも順次実施されました。

平成10年度の歯科保健指導は、中学校8校、小学校22校、保育園・幼稚園29園で実施され、参加数は児童生徒4,151人、園児809名、保護者537名で、歯科衛生士の延出動回数は142回です。

指導内容は、歯肉炎予防のための正確な歯みがき方法の習得、フッ素利用についての情報の提供など、歯科保健全般にわたっていて、子供たちだけでなく、成人のむし歯や歯周疾患の予防にも結びつくよう配慮されています。

成人・高齢者への対策

市町村の健診、事業所健診、人間ドッグなどで、歯科健診や口腔衛生指導が実施されていますが、受診率が低く、具体的な予防対策に結びついていないのが実情です。

訪問歯科診療・訪問口腔衛生指導

富岡甘楽歯科医師会では、口腔保健センターの設立と同時に、訪問歯科診療を開始しました。診療依頼の

増加に伴い、平成6年には担当理事を置き、特殊診療委員会を設置しました。平成8年には、群馬県と富岡市の援助により、訪問歯科診療と障害者歯科診療の送迎用に使う車両も購入できました。さらに平成10年度から、管内市町村より補助金をいただき、会の事業として健全に運営できるようになりました。

訪問歯科診療の患者数と回数は、平成4年度から毎年増加傾向を示し、平成11年度の患者数は40人、訪問回数は169回となっています。治療内容は補綴処置〔義歯関係〕が最も多くなっています。

また、特別養護老人ホーム、老人保健施設、デイサービスセンターなどで、年1回をめぐりに歯科健診と口腔衛生指導を実施しています。

富岡甘楽地区では、治療に対する要望にはある程度対処できるようにはなりましたが、効果的な予防対策が実施されているとはいえません。歯がたくさん残っている人にむし歯が多発し、かえって対応に苦慮しているケースが多く見受けられます。

心身障害者の歯科診療

富岡甘楽歯科医師会では、平成6年10月から口腔保健センターで、心身障害者の診療を開始しました。診療日は毎週水曜日で、診療スタッフは専任歯科医師1名〔午後は2名〕、歯科衛生士2～6名で診療にあたっています。運営に関しては、平成7年度から市町村の補助金を受けています。地区歯科医師会が運営するものとしては、県内で初めての心身障害者歯科診療施設です。平成11年度の受診者数は延499人でした。

今後の課題

以上のように、私たちは、個人では対応が難しい公衆衛生的事業の推進や弱者への対策を実施していくのが、歯科医師会の本来の役割だと考えて活動を続けてきました。これまでの活動を通して、子供たちのむし歯や歯周疾患の予防、訪問診療、障害者診療などで、着実に成果を上げてきましたが、このままでは限界が見えてきたように思います。市町村の事業に参加しない児への対策、縦割り行政の弊害が出ている小中学校での予防対策、対象者が多すぎて有効な事業の実施が難しい成人や高齢者への対策など、現状では解決が難しい課題が数多くあります。

この問題をいっきに解決し、今後さらに成果をあげていくためには、地域全体を対象にした効果的な予防対策が必要になります。それが水道水フッ素化だと私は考えます。

公衆衛生的予防対策の重要性

ミシガン州グランドラピッズ市で、世界で最初の水道水フッ素化事業が開始されたのは、まだ日本と太平洋戦争を戦っていた1945年1月のことです。

その後、世界保健機関(WHO)が1969年の第22回総会で、水道水フッ素添加の推進決議をし、加盟国に「水道水フッ素化とその他のフッ素利用の推進」を勧告しました。日本も推進決議の共同提案国になっています。さらに、WHOは1974年と1978年にも再度勧告を行っています。

その結果、むし歯予防のためのフッ素利用は広く普及し、世界中でむし歯が激減しました。現在、諸外国では子供のむし歯は過去の病気になりつつあります。

水道水フッ素化は、費用が非常に安く済み、簡単に実施できる安全な方法です。また、大規模に実施することができ、むし歯予防のためには最も優れた公衆衛生的手段です。水道水フッ素化は、給水地域のすべての住民に有効で、子供たちのむし歯予防だけでなく、成人や高齢者のむし歯予防〔根面に発生するむし歯の予防〕としても生涯を通じて有効です。また、貧富や意識の差に関係なく平等に恩恵をもたらします。

日本でもやればできる水道水フッ素化

日本で水道水フッ素化を実施しようとする、水道法の水質基準〔フッ素濃度0.8ppm以下〕という制約がありますが、その基準さえ満たせば、現在でも水道水フッ素化の実施に何ら法的な障害はありません。たとえば、フッ素濃度約0.7ppmなら、すぐにでも水道水フッ素化を実施できます。もちろん、歯科医師会の責任ある行動、行政の決断、住民の支持は少なくとも必要になると思います。

(資料) Dental Today 2000 年 8 月 1 日号

水道水フッ素化への理解深まる

3 人のジャーナリストをまじえて議論

群馬県甘楽町では行政と歯科医師会が協力し、住民の口腔保健の維持・増進のため活動していたが、その活動が評価され、平成 11 年度群馬県歯科保健賞を受賞した。この受賞を記念して、6 月 25 日、群馬県・甘楽町文化会館で、「一生自分の歯で食べるために」をテーマにした、歯科保健シンポジウム in 甘楽町（主催・甘楽町）が行われた。読売、毎日、各紙をはじめ、マスコミが報道している、齲蝕予防のための“フッ化物応用”や“水道水フッ素化”の普及について、馬場錬成氏（読売新聞論説委員）を座長に、小原博人氏（毎日新聞編集委員）、村田幸子氏（NHK 解説委員）、境脩氏（福岡歯科大学教授）、萩原吉則氏（富岡甘楽歯科医師会専務理事）によってシンポジウムが行われた。会場につめかけた住民は、熱心に各パネラーの話を聞いていたが、水道水フッ素化について黒沢常五郎町長からも「自信を強めた」と発言があり、会場から拍手が沸き起こる場面もみられた（各演者の講演記事は 2 面）

冒頭、馬場氏の、水道水フッ素化が実施され、齲蝕が減少すると、歯科医院の経営は厳しくなるのではないか、という現実的な質問に対して、萩原氏は「現在の保険制度ですと、かなり厳しくなると予想しています。私の診療所では患者数は減少していないのですが、歯の削除量、削除箇所が少ないので、一人の患者の保険点数は低いことは事実です。この点の対応を十分な検討なしでは、歯科医師会としての対応は難しいと考えています」と答えた。

水道水フッ素化推進を評価

関連して境教授は「アメリカが水道水フッ素化をしていたが、収入は 1965、85 年の間に 2.12 に上がったとされ、むし歯を減少させれば、それだけ収入があがるということになった」と海外の例を示した。同時に、アメリカ国民が、多くの職業の中でどの職業を、尊敬・信頼するか、という調査を行ったギャラップ調査を紹介。歯科医師は 3 位であったが、その理由として「アメリカ歯科医師会は論文で、水道水フッ素化の推進によるものであるとはっきり示した」とした。

厚生省に水道水フッ素化について取材をした小原氏は、遅々として実施されないことについて「むし歯予防にフッ素が効果のあることは理解しているのです。理解しているが実施していない状況が続いている中で、新しく一步踏み出すことをしないのが無難、という意識が根底にあるのでないか。このことが結果として実施していない、ということになっている」と説明した。

WHO から 3 回実施勧告、世界 57 か国で実施

このような状況を馬場氏は「先年、HIV 薬害事件がありましたが、担当責任者が逮捕された理由は、公務員の不作為ということです。行政官としてすべきことを怠ったということです。今、話題にしているむし歯予防として、歯磨剤へのフッ素の配合、フッ素洗口、歯面塗布などが実施されていますし、保険診療でも認められています。

しかし、それらより効果があるとされている水道水フッ素化が、WHO から 3 回も実施勧告、世界 57 か国で実施しているにもかかわらず、日本では一か所も実施されていない、という誠に不思議な状況なのです」と行政の姿勢を追及した。

一方、ラジオ番組でフッ素の問題を取り上げたことのある、村田氏は「一般の方からの反応で、水道水フッ素化反対というものはありませんでした。フッ素がむし歯予防に効果的であることを、昨年、専門家である歯科の関係者が、調査した結果、安全、有効、経済的であると報告しているのです。にもかかわらず、それがマスコミを通して広がっていかないという現実があります」と現在の課題を示した。

その一方、「現在の水道法（0.8 ppm 以下）の範囲の中で、できるのですから、本当に地域住民の健康を守る、つまりむし歯にさせない、という強い行政側の意志があればできるのです。甘楽町はいかがですか」と町長に問いかけると、黒沢町長は「先生方のご意見を拝聴しまして、一日勉強させていただきました。多少の予備知識はもっていましたが、大いに自信を強めたということを、申し上げておきます」と述べ、実施への前向きな姿勢を示した。

各地域で実施への胎動

現在、沖縄県、栃木県、東京都の一部の市町村で自分のところで実施したい、という動きがあるが、馬場氏が「水道水フッ素化を日本で最初に実施することに意味があります。是非、甘楽町も一歩踏み出して、日本のためにリーダー役になってほしい」と熱望した。

最後に、それぞれ演者は次のようにまとめた。「今日は今まで経験したことのない興奮を覚えました。このような企画をあらゆる町で行えば、水道水フッ素化が実現できるのではないかと思います」(境教授)、「マスコミは自主規制してきたが、良いものは良いのですから、我々は書き続けなくてははいけませんし、テレビでは放映し続けなくてはいけないということです」(小原氏)、「主役は地域住民です。住民がこのことを正しく理解するにはどうしたらいいのか、考えてほしいと思います。なぜフッ素がいいのか、どのような効果があるのか、行政あるいは歯科医師会がこれをわかりやすく解説・説明していただきたいと思っています」(村田氏)、「ポイントは 3 つあり、まず歯科医師会が専門職として責任を果たすこと。行政は住民のために仕事をする。マスコミは正確な報道をすることです」(萩原氏)。

最後に馬場氏が「世の中はスピードの時代に入っているのです。行政もスピードのある判断をし、行政施策を実行しなくては、世の中に遅れていくのは当然です。中央行政官庁も一部の役人の裁量行政という時代はもう去ったといえます。我々国民一人ひとりが意見を述べ、行政に反映するように働きかける時代です。是非、この問題も、甘楽町に限らず、全国に訴えていくつもりです。マスコミとしても一緒に良き方向へと努力していきたいと考えています」とまとめた。

今回の企画は住民と行政、歯科医師会が一体となり、自らの地域の歯科保健を考え、その最良の方法の実施に向けて一緒に考えた熱気あふれるシンポジウムとなった。関係者の一人は「予想以上の盛り上がりがあり、歯科医師としての責任を感じるとともに、全国各地でこの思いが伝わることを期待したい」と語っていた。

(2面)

歯科保健シンポジウム in 甘楽町

シンポジウムの前に行われた講演は各立場から、現状確認を示しながら、課題と期待を述べた。

最初に講演を行った境・福岡歯大学教授は、「先進国をはじめ世界の多くの国において、その普及のため地道かつ懸命な努力が行われている」と、歴史と背景をまじえて報告した。また、WHO（世界保健機関）、FDI（国際歯科連盟）によるフッ化物利用状況を紹介し「水道水フッ素化：57 か国、フッ化物錠剤：67 か国、フッ化物配合歯磨剤：97 か国、フッ化物洗口：81 か国に及んでおり、最近では、世界の多くに地域や国々において公衆衛生的なフッ化物の応用が進められ、むし歯有病率の劇的な減少を伝える報告がある」と、フッ化物の応用は世界の常識であるとした。

続く小原氏（毎日新聞編集委員）はジャーナリストの立場から、日本の歯科保健対策の問題点を指摘したが、そもそも歯科に関心をもった理由について「キシリトールが話題になった3年ほど前にさかのぼり、社内の事業系部署の者からキシリトールはむし歯予防に良く、今後大きく期待できる。その紹介記事を書いてほしい、という依頼があり、記事を書いたことにある」とし、その経緯を説明するとともに、「新しい時代に向けて、新しく正しい情報が発信される中、従来の情報に振り回されている記者の問題もあるが、色のついていない、若い記者を育てることも必要ではないか」と提言した。

公衆衛生的方法の必要性

一方、村田幸子氏（NHK 解説委員）は高齢社会と歯科保健の課題と展望について、「8020運動の根拠」、「歯の丈夫な高齢者は元気」などを中心に順次、解説した。「高齢者の楽しみは話をすること、食事をする事です。それは晩年の人生をいかに、快適に生きるかに関わってきます。

生活実感を踏まえて意見を述べた。実際の状況を踏まえて「歯の健康を維持するためには、個人の努力、専門家の指導、行政の役割などが重要です。しかし、個人の努力には限界があり、やはり公衆衛生的な方法も取り入れることが必要になるのです。これはまさに、個人の努力と公衆衛生的な方法が、車の両輪になることで、高齢者の歯科保健対策ができると思います」とまとめた。

地域全体への対策

最後に地元甘楽町で開業している萩原・富岡甘楽歯科医師会専務理事が「富岡甘楽地区の歯科保健対策の成果と残された課題」について報告を行い、乳歯のむし歯予防対策、永久歯のむし歯予防対策、歯科衛生士による巡回歯科保健指導などの実施状況を説明した。さらに「私たちなりに様々な歯科保健活動を実践してきましたが、ある意味で、限界も感じています。それは市町村の事業に参加しない児童対策、縦割り行政の弊害が出ている小中学校での予防対策、対象者が多すぎて有効な事業の実施が難しい成人・高齢者・障害者などの対策です。これらの問題を解決するものとして、やはり水道水フッ素化が、地域全体を対象とした効果的な予防対策であると考えています」と今後に向け、水道水フッ素化実施への意欲を示した。